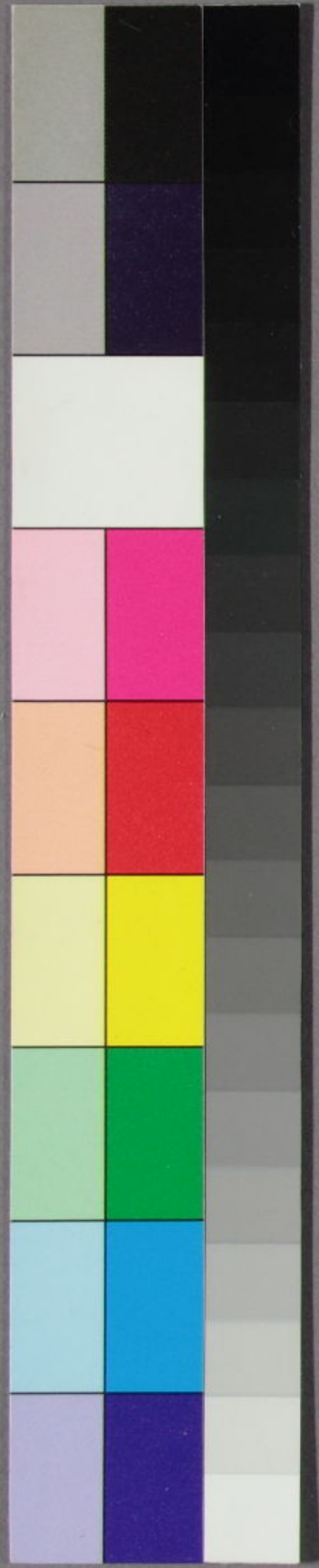


燕石藻屑物語

四輯

壹

信
679
91



燕石十種第四輯序



一期乃夏あくくして終身の樂ありといふ谷が待りして天の下こそたの
 しみしとの仲等が欲よるん曾くもく人毎に樂り其樂ふ雅俗の
 參差の有きと嬉む情ハツめしておつれば同く谷川の氷を樂みひを
 樂む智者と仁者の樂あましく眩枕以樂と云ひ流枕して樂ゆんと
 云一の聖と賢との逸あましく昼夜學問をもあそびをももれども
 せいの源氏三頭中将が幼きころまふ真體を抱きて懐む男女の嬉樂
 して泣て嬉む齊間と同夫の牀二人躑躅の三人齋一賑然と笑ひ上房
 酒を般ミ下戸のちひの喚犬追馬鏡に向つて靚粧ふお宿さぐりの劇場
 見物ふ肩くく虞を夜あけを帳む出番の小僧起て勤く浮世の馬麻と
 下衆の寝らくを悔て賣つたる妻を買つて嬉む名唐人の利者あ
 れば松丈小黄白をわして己が媽を貰て愉む鼻の下にほん人も鈍痴

兼あり。されば聖徳小樂んで嬉せずと戒られし。斯等も架まらぬ。
 或は花は小樂して英氣困て也。此は月小たのしみて小寤てあらずらん
 人さそりきとつらや。やほふうふいりいほふ詩を賦一秋を吟じ
 各意を遣て。意氣ハ意機たけ小虞み。空氣ハ虚戲たけ小なりむ志奇。
 枚一挙ふ違わらず。粵小活東子と以樂人あり。予と同職全癖お共ふ
 彷彿の漢子ゆして。鬻書の忙閑雅も逸と俗も樂み別く。神史小説を
 般む餘興珍書若干を輻の自他の娯よ為んと毎輯十卷を一帙目
 て燕石十種と以。三輯も既は成り。四輯小迫て一言を請ふ予が戲文
 小愉を知ればあり。則速小背く例の照かから序を書く
 文久紀元辛酉ノ三月上澣四日市場の小店よ於て活計の隙なき間
 幸を把取

江戸 陶々逸民 法齋 悟一 戲題
 花乃屋三世 櫻井蛙麻呂

燕石十種第四輯卷一

藻屑物語

江戸書會

活東子輯

花ハ淡血り色あるを以て自らその枝をうらふ。されば今の世の御後
 見ごとく殊小時光き給ふ。松川侍従の由とふ。昨日もやは之傳ふ
 童小伊丹右衛門といふ。りりり。これ枚り中。わら心をとるを以て
 そのつらさををり。まの東敷。此花小をうらふ。教ある後の事を
 おひし秋を瀧田川。此月小かあ。秋ハ貴く忠峯。むもかあ。叔詩ハ
 杜子美。李白。跡を慕ひ。其外の事。學ぶ。て。覚え。まの。拾まの。疑。して
 林泉。内。ね。文宣王の道。を。ゆ。め。給。ふ。顔。淵。も。わ。あ。ひ。亦。其。の。道。を
 子路。が。勇。を。ぬ。く。け。ま。見。る。人。き。く。人。う。る。を。ほ。さ。る。の。あ。か。の。光。海。氏。の
 君。ま。ま。を。京。中。將。た。り。と。名。の。こと。と。い。ひ。傳。へ。る。ん。ご。と。な。き。人。も
 此。右。系。ふ。ま。あ。び。て。い。ま。を。ゆ。き。程。も。り。ん。や。され。ば。あ。む。ふ。ん。ご。と。と
 思。い。を。富。士。や。淡。阿。の。煙。た。ら。し。神。の。ま。か。と。唐。土。舟。の。病。と。を。り。返。慕。ふ

のうらをきこえてそのおくり

引こたへ心の園も陸奥に

あつちのちのちの袖の露うら

と涙ぐましくを嫌なりける人持けを後かしのいとまある人自を
うらむひてかあるこけいとまき油よとて目こぼれと枝のゆふおちりて
たゆらひなきとけをれなき階もたうくさくさくは住家とあえ
とよの人か慥然とものまらもむらむらとぞけりなきおうく右京南の表
のまうと通くくせして何となく花のうけなきも揺りた散るまうの
氣はる海へ入るる船の風ふえあくるを煙のさそりまふまふと
りく斗なるの傍の鏡うりあてまき堂の響を丸きうくあくく終りて
後花のりこくまよりして

船の跡いそのまき結ぶ花のうら

心こもるなきま風もあ

と朝の目こくくさるる有さゆ又きくいとまをわげゆらいつある遊言敵も
むまむらゆぐまわの人のむをあやませもとまらあさうあ嫁もえび
まをまむいあさうおわらかすい人もあくさくさくあふ彼消息を袖の中
の投入者まばかの人もまわくくをまきまきいあまの志げみく入るるまふ
目ん連の事なまりやゆらりて妹を抜きしあせ事をばいひけりて我
か一慥然と人たうくまわくも仕らぬい世の人のを顧みまきいひとま
入るる嫁とまきまきまきりありて事ごと法りてあつちのうらゆ彼
も深く人自を思ふと見えたりさけらるる産屋のを産みまきあひなまて
待ちまらぐくしなきも勤めいひひらねが産女せまもまきけりてさ
なまき熱いそをまきゆらんやまき深あみ揺りてお勤めけんおあす友
うらむくめらぐくけあちあわくひけなまわくは命を助りまの事の
目もあつちのうらとまきまきけりてあつちのうらとまきまきあつちの
あつちのうらとまきまき

きうくとあつせ初めとあつせ

透夜をさう無みをいせん

と定一々光陰をさしけるも在東の中将の如くめども妻のかぶりいふと録
し昔も今もさうなりをさるる時一も暮春

將軍家横川の侍従のりふなうせらるる一と旨 作也さき知月上院か
らせあし御親式も事小目をおごらうは出候ひあり先奉の今も六井大炊頭
井伊掃部頭酒井登俊も同徳系も松平伊豆も河部豊後も同對馬も朽木
氏初が浦中根を及ぶ辨友橋本も小堀誠中も右田徳中も二浦志麻も久世
大和も酒井和泉も辨友佐藤も柳生但馬も井上外記小堀遠江も仇久同將監齊
信濃も福葉英濃も安友右京進小幡孫市之元立辨徳同幽也氏部辨法平
道春式部卿法平就慶春日御局上野天海大僧正源重中尊権僧正荒
波金地院之野之云量院東海寺沢庵和尚御茶道長井宗信山同朋
福河保御船之衆向井將監小湊氏初が浦堀之を辨就の家系顯出る艘の

龍改鶴首の御船を浮べて侍奉る所

將軍家御使よげふ赤のらせらるる水さふ咽をさうさ漕法くねる
その氣色誠ふ人界の事と見しつ佛生國うこ今さう目をおごらる
斗あり起してきつの徳をの人數九八百余人とぞゆめえさるる頼る御船より
りぞせあつる侍従は遠く在るか有がうも今日あつせあつ事定ふ
家の面月外少実候眞加つ修了候と是を定む振ふしつかはさる
あつせ程あり 御船くさるせらるる御去をわさる辨ふ多むいまたあつ
名義葉舟肩衝の御茶入及び義光の御刀まさ日瑞とやらあつ馬よ
濃紅の尊怒うけて合人八人あつ宰せらるるをを賜り多実や身あ
ゆりてを見ふるねとの後程御機嫌さうさう空六いまさるさあ
知月の初少狐修く頼く唐を御使下してふらりの題をを括
けり

帰鷹

集りちり中もと一我を見新しき人なりとわらへんとかえりて
まのぶかろちありし處もくちりては身女が心あしけり羊の如き
心門の駕かきをぬれば右京もきふを一般の死出まはく清くあはる雪の
まごふ白き旅路を記す紅梅の裏綾の山袖もみ色なりこれを見りて
相見を催せ人同ぶ川鏡の禱ふもあはるを見まはれぬの事於際
まげも催せぬの涙をうんとすまひも思ひ出れりいさなきもい
ま〜うふ守中れこあふ涙おくれさる様一際涙をを見りて繼藩
年々花残ヲ指ニ侍ニ後春ニ是人心頼むがこきいふ人の心さうも恨むる身女
事かであらざるに時別もさうもなりいづ〜宿願をきんとみぢりのま
髪や〜きり介錯吉川勘解由ふひ是は於堀川の母の心もさうも
〜清きのおかし〜永さか〜も見あ〜と居〜と〜のみさあ〜まの
髪をうさげ〜と〜和尙欠まり右京ふむひ心のうち暗るぬの
罪深〜也事りりあ〜むあ〜びつ〜みあ〜ま〜た〜い〜さ〜ま〜

げふ影ふりりげ厚き情の〜思ふ事何〜ふつ〜み〜生
者必滅の〜事り〜と〜是悟の事ふ〜ハ喜を容をり〜と〜
幸を達〜と〜自叙の〜と〜外と事 是而公成佛ふ筆を深釋せ〜
おぼ〜

まは花秋と〜みちとた〜い〜
おぼ〜事〜も〜の〜

和尙洞を流〜と〜い〜ぎ〜と〜と〜のうけ佛あり〜し
三界一の介ヲ別法何〜と〜い〜ら〜未姑息もあ〜と〜
えん〜と〜んと先居士位をあ〜と〜

花童院剣切利空居士 伊丹右京 享年 十六歳

とま〜けま〜右京改をさげ死出の名も〜と〜ぬ〜と〜さ〜のさか
をい〜か〜と〜と〜舟川宗女是も純ぬきの袷ふ袴のそば〜
とり守中のか〜と〜と〜をり出右京〜と〜りは〜と〜

ふかきとせぬが我こそ先ふ三途の川の瀬踏をも志し侍らんとおが
く腰つらきつらき穉世

法喜ふいづて我もこゆるがせ

いとぞとこゑん死ぬの心川

かくいひ直右のわたりまうけうが後のいづひよきちがひおわさあり
て外ふらふ体。君が一日の情ふ妻が百年の齡をりやまらさういひも
是をらん惜むて悲む屋十ちやと十八やを二部うて實水の妻
のまらまて母のちり欠まぶ咲残る卯月の花のうや風ふさそんれ
て終る縁や涙の流と消みいこころも涙あさびー家のいづも
とやてまらひー初子の泣まのいと定あさ初ていりんとと慶養寺ふ
て松をわらうー主人の菩提を吊りんとは心の程をのりきさして
不いふ二人の平をあく穉世を位牌のうふ彫はけ今の世をを
け寺の朽ぬその名を残しあさそとも志賀左馬助の娘といひゆて

采女とふう繋りー申あれが追舟で腰切るさの中くその氣をも
たう訓花よもみちとつらむきて死んだけーさもんてんが若さ
んくあつみのあつ後いふあつけいふあまはあつわく由であまのふ
りのうさういー命いあつさのうたご初あつわくさあつさ
花臺院と采女が初顔の志日之涙あまららーの世の中やと皆涙
を流ーあつ待弁連涙をさげーふ左馬助人より先くさみおて

むはゆー繋りー人を先きて

園路ーまよふ身をいふせん

と書てふのうら劍ふまらあれをさ

身をいふせんとおもつて腹をきれ

多れもらの世ふとある人あ

なごう嘲り侍らうー殿の山車へも介ーをいふおがー若ーあん
常ふ怒る事たうーらはいさうれども左馬助あつてふせまを初らう

と奥書有りくもを記しはうきを慶養寺
 有り連ふ借抄せしむりていもむく傳寫此幸之
 西書が男色大鑑卷の二ふ載しるもこの書の文を多く
 とり用ひしと憚りる人名を省きたるものなるもバ藤屑物語
 の貞享二年の記録ある幸あきらけく文章の拙あらは
 しく論をなすは是も當時の人氣をあらはし一端なるは
 写しりてし書しふく敬言め又人を減るものなり
 右藤屑物語一幸使小野濟生膳宴以収干家龍澤鮮車識時天保四年癸巳
 九月

大笑道人

萬延元年庚申仲夏流覽一過

活東子

藤屑物語總評

魚英乃あ

藤屑物語批評并小序

ちとやう神田ある雛子町の河うと忽くいゆる二月チカキより先九日
 慶養寺の檀越外屋某ふ備抄しむるも藤屑物語の一書ありと
 ゆゑ其友ありたる心鳥子をとりて被雛子町へきて被讀て是を借りて
 始終の事果て遂ふ写しとりたる正月九日の旦ウシメより其の疾言の刻の
 以及るまで一幸本も只二日計りか同の勝寫せしむるも悟字脱文
 あまり有りて被忽く写せしむる本の奥書ふ天明ラ多七年来の初
 を常陽乃人系写しと記せしむるをあらわたりうれいしむる
 傳寫の本あるも悟の多チカキあるもあまり之既ふ貞享年間ふ刊しせし
 西鶴の大鑑もは藤屑物語をのせしむる也世に憚りる人の名を省きしむる
 原本の貞享以前の記録ある事知る也一文辭のいとむく拙きありふ

色女より見し其必至の勢かことりてを五難廻ふ見えたる宜なる
李平吾嘗曰テ難姦即を禱るは屏花の歌りり近自り邦の男色や
衰しつゝの恭平の陰澤あり戦世陣列のささる女不痴の道行はあを
以て男寵身とよその腐屑物縁を見て我は其を批評する其事石
貞願巻の十に載る潘文子王仲先の情死の事よく知る思余其
願未を思つた右系を殺したる未女之亦未女を殺すとの左馬助より
互膳を殺したる此の松弁之其禍胎全く公の男寵より起るをあるは公の
夫人吾輩あり文信義を咽ふは為しと忠孝を君父に侍るを公の
情慾の迷ひ之件の人人の大道を知りて迷ひて煽りてまの愚あり
義理の暗きつ故必至の勢と自ら禁ひる事能はぬ忽地禍を醸して死
至て悟らば是當時の人情あり今の人の如くは當年の氏石松藩よりて公の
堪はるといふも亦陰力ありて公の如くは是故に義理の通るを公の
悟をたせし文道字を淫邪の器用は是自然の理之但淫屑の今公の男寵

の此言あり怪むる一夫と淫を貪り慾を放ちたるに至て女色男色果あり
事あり就蛇の蟠脚の穴に入るは虎豹の執狸此野に遊する男を害するを
女色不悔するもの就蛇の穴を解き穴を遊するはと信守ありあふ
これを誡むあふは淫屑氏をや平らまらるる女不嘆息しと此書し
蛇足を添ふるものあり

文化六年己丑正月晦日書于飯谷隱居

澆澤解

卷中衍脱説誤字改補

第一張六行 春ハ東教心の花ハ 殿ニ化ルヘシ

月九行 李伯 李白三作クヘシ

第二張四行 心ハくくくくして言ハるハ緑ハもとくくハ緑ハ艶ハ

禪ありき

第三張六行 うはくありき事やまへんや上のやの字衍字ありき

月九行 後ハ思を好いしハ後ハ物をも好いしハ思

ハおのりやま

月九行 上野國神奈川ハ位たまハ父母そく神奈川ハ

或ハ神奈川ハ上野國ハ誤ハ末ハ所ハ采女ハ川ハ

母のわくハありしといふと知る

月九行 國ハくくの一君ハ初ハ谷ハくくハ谷ハくく

未詳國ハくくハ君ハくくハ國ハくくハ事ハ初ハ谷ハ初ハ

長谷ハ訓ハくくハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

解

月九行 心ハくくハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

まへハ思ハくくハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

月九行 軒ハくくハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

五張二行 初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

花ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

月九行 又ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

月九行 又ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

月九行 身ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

月九行 身ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

六張五行 事ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ初ハ

る

此書始ふ采女う右京を眷念せし時既ふ庭の花をあらた
の隙あり花とわれいさくあるべし但梅をまより采女急病
して其意のかあらぬ二三十日を経てあるべしかくしては日
十七日の夜右京の庭を討さるは五日経て自刃と定りたる
程迄さくさくの盛血といふあり事始より終るふまは
五六十日或は八九十日の写あるべし始終の花をりて采女と
幸いとあやしめし書をして其書なるはよあるべし
子興氏の金言うべあるか

亦三張十九日

人の國くま誠き

他の別の誤

日張 亦

書院のやり戸をりて那へては先きあけてまは
た馬脚の出奔の條あり た馬脚七令せん

ふ此宿の夜やり戸をりて迎おんとせしをこのおれんと

らくといふ事心持かたした馬脚とて迎おらんこあらは
かの夜あらはとも走らるるさくさく心くもわたりなんや
おのつ宿あらりか物のおりもあしてまはる白昼ありとも
人まきこれを知らん 大體の采女う七日の退く夜た馬脚
も自殺せしと有りは是ありや

古は張 初

七夜のうらふかひせよと伝出され害せよ

日張 十

返若人々い 返るくさくさ今も返る之脱字

○筆記のとの采女う戒名を載るるを恨と

總評

伊丹右京ハ其々の男寵を好むもの之を舟川采女これを
眷恋ハ其の迷ひ思ハ亦た馬助と云ふもの采女親友之情を
懐めしして遂て其情慾を遂せんせり此亦信義の人あり
れ其の迷ひ思ハ又罪あり君寵の亦を去て左馬助其
のこれ終ふ采女と真骸を抱く是又忠義の人あり此の三人忠義
わらハ義ありしは是聖人の大道を知りしは故に尾生橋梁を
抱くの信をりて死して悔ハ悲いしか細路主膳は藤井松舟を嫁せり
右采女思をうらむ事亦采女其の迷ひ等其罪終て輕重
あつて其の思を果さざるを恨て右采女を討んとせり其迷ひ
究けり右京此事を他々するものも亦其虚實を知れ然るを
左膳を討て其過干を田舎るは勇餘りしつて其智ハ其早ハ其
さうハ自決す此討を那若也此事を好むは竹井主膳の心をわら

侍てあまを數ふる若し主膳怒ハ侍て右采女を殺めんと罵るも亦思
はる事何ハ其罪動し右采女は只人のあつ言はるを信て
事と思ひ定るは後智の不知之弱事の誤かりし世ありし
慎むト右采女を寵はるのあゆりこれを教はる思ひ此れ采女裏の
あつや主膳の母あまを果院の惣辨せしも亦其不知は内友
生又内友の依て其異見を加へしも亦其不知は足成して其情を
りていふおのれものあり

左馬助松舟又刑ふわ事果して実あり極て是苛法之也遊教して
可なりと男寵ふし川右采女を助んて却て左馬助と松舟を教はる事
皆私情ありと道ありは右采女ハ不忠不孝至極の人之主膳左馬助松舟
等ハ不狂人して狂人と云ふ是れ人々痛むる事ハ藤原物語の作
者此等事を述て勸懲心の云葉少し文辭の俗あるを述てはの光りて終
らむとせし義理分明ありし事多かり是を見し立皇子等信義ハ

かゝる人のことばをあたふと思ひまはしむるもあつ人を蛇足の辨を添ふの例の
僻言もあつらん

各名氏批評

此補文中の
推子阿の君は
有の家長母友
市街の町ま
とるのり月
五の世の息
右のみのり曲亭馬足今屋層物語の甲午を所くまうの思より借ひてかひ附れ
小せく終る
又云屋層物語及るみのりとも今今斎友月只今君不居せり其を借ひて
写し他一巻のり一其片扱名あり

慶應四年 戊辰五月十八日 写す

只傳

